

米国イリノイ州におけるギフテッド教育

— 3校への訪問調査から —

伊藤 駿^{1,2}・小谷 裕実¹

(1: 京都教育大学・2: NPO 法人 ROJE²)

Gifted Education in Illinois State, US — Insights from Visits to Three Schools —

Shun ITO, Hiromi KOTANI

抄録: 本稿は、筆者らが2024年8月に米国イリノイ州にて実施した訪問調査の結果を報告するとともに、日本のギフテッド教育に対する示唆を検討するものである。ギフテッド教育の先進事例として認識されている米国の中でもイリノイ州の私立学校3校に訪問し、調査を行なった。それぞれの学校の特徴を出しつつ、2Eと呼ばれる児童生徒を受け入れるか否かなどの方針も学校によって異なっていた。最後に日本のギフテッド教育に対する示唆を検討した。

キーワード: ギフテッド教育, イリノイ州, 米国

Key Words: Intellectual disabilities, Integrated instruction of Subjects, Subject-specific instruction, Guidance on self-reliance activities, Relationship of instruction

I. 問題の所在

本稿は、筆者らが2024年8月に米国イリノイ州シカゴにて実施した訪問調査の結果を報告するとともに、日本のギフテッド教育に対する示唆を検討するものである。

筆者らの所属する京都教育大学では、2022年に既存の総合教育臨床センター内に学びサポート室を設置し、本学の附属学校園および京都府内の学校現場への支援に重点をおいた研究活動を実施している。学びサポート室は4つの部門から構成されており、それぞれの1名の専任教員が配置されている。本稿に特に関係の深いところでは、2024年3月より「知的ギフテッド教育支援部門」を設置し、いわゆるギフテッドと呼ばれる子どもたちとその子どもを取り巻く様々なアクターへの支援を行っている。

ギフテッドの子どもたちをめぐるのは、2021年に文部科学省内に「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」が設置され、少しずつ国内においても注目を集めるようになった。詳しい分析は別稿に譲るが、この有識者会議の議論を見ると、はじめのうちは比較的、「特異な才能を伸ばす」という議論もなされているが、途中から支援を要する子どもたちとして捉えられるようになっていく。推測の域をでないが、日本においてはギフテッドという言葉からは「天才」のイメージが強烈にあり、支援の必要性が理解されないという状況があったと考えられる。経験則にすぎないが、ある全国放送のテレビ番組で筆者が関わっているギフテッドの子どもたちを取り上げられたことがある。その時のSNSの反応は、決して共感的であったとはいえず（幸いなことに、子どもが所属している学校教職員にとっては子どもの抱えている困難を知ることになり結果的に支援を受けられるようになったのだが）、この領域における社会からの厳しい眼差しを感じるようになった。

ただし、教育現場もこのギフテッドと呼ばれる子どもたちの支援を全く行ってこなかったわけではない。才能教育をテーマに国際比較研究に取り組んだ山内・原（2018）は、日本においても戦前からいわゆるギフテッドの子どもたちへの教育を行ってきた教育者がいることを示している。また戦後の混乱期においても、現在に

まで続く七田チャイルド・アカデミーの創設者をはじめ、特に公立学校外の私立学校や私塾的な位置づけではありつつ、ギフテッドの子どもたちへの教育に取り組む動きがあったことが明らかにされている。また、その他にも、スーパー・グローバル・ハイスクールやスーパー・サイエンス・ハイスクールといった特定領域への公的資金の投入や千葉大学をはじめとする飛び級入学の取り組みなど、一定の試みが現在でもされている点は注目に値する。他方で、こうした取り組みは、やはり例外的な措置であることには違いなく、教育のメインストリームにギフテッドの子どもたちへの支援は入ってこなかったこともまた間違いない。

そうした中で、しばしばギフテッドの子どもたちへの教育で注目を集めるのが米国である。米国は州ごとに特徴を持つため、十把一絡げに言及することは難しいが、才能教育の先駆的取り組みを続けている国として耳目を集めてきたことは間違いない（関内 2020）。こうした米国における才能教育について論じた研究として松村（2003）を欠かすことはできない。松村は教育心理学の視座から、米国の才能教育に通底する理論とそれに基づく実践についてキーワードをもとに描き出している。しかしながら、各学校の具体的取り組みなどについては十分に報告されていないほか、松村の研究から一定の期間を経てそうした実践が続いているのか、それとも何かしらの変容が見られたのかという点については十分に検討されているとは言い難い。

これらの背景をもとに、本稿では実際に学校を訪問し、その実践の一端の様相を明らかにすることをめざすこととした。

Ⅱ. 研究対象および方法

1. 訪問調査の概要

本調査は2024年8月5日から8日にかけて行った（表1）。調査に先立ち、各学校に依頼のメールを送り、調査のねらい、訪問して伺いたいことなどを予め伝え、調査の許可を得た。なお、いずれの学校も私立学校である。また本研究は、筆者の伊藤が研究分担者として参画しているプロジェクト「知的ギフテッドの就学／修学サポートブック開発（日本版／国際版）のための挑戦的研究」の一環として実施している。本プロジェクトは千葉大学教育学部生命倫理審査委員会による倫理審査を受審し承認されているものである。

2. シカゴのギフテッド教育

米国イリノイ州に位置するシカゴはイリノイ州の最大都市であり、ニューヨーク、ロサンゼルスに次ぐ人口を有する都市である。筆者らの訪問調査では、イリノイ州において、ギフテッド児への公的な支援はなく、そのために公立学校ではなく私立学校がその主たる受け皿になっているということであった。

しかし、Chicago Public Schools Gifted Programsと呼ばれるプログラムがあり、これに採用されると最大2学年上の授業を受けることができるようになる。その点において、あくまで通常のカリキュラム等においてギフテッドの子どもたちのニーズを満たすことは難しいながらも、先述のプログラムを活用することで、一定の支援は受けられることが想定できる。なお、このプログラムは公立学校のみにかかれていたものであり、学力および認知テストによって、選抜されることとなる。

また、シカゴにはChicago Gifted Community Centerという組織もあり、ギフテッドの子どもおよびその保護者に向けた情報提供も行われている。このセンター主催のイベントや勉強会もありつつ、地域にある学校の行事などの紹介もされており、保護者は子どもの学校選びの際などに参考にできるようである。

Ⅲ. 各校の取り組み

1. Vanguard Gifted Academy

(1) 学校の概要

Vanguard Gifted Academyはシカゴの中心部から車で1時間と少しかかる郊外に位置している。元々は、銀

行であったという建物が学校になっており（図1）、広い庭があるほか学校の裏に森があり、そこで自然について学ぶこともできる環境になっている。児童生徒の定員は24名であるが、現在は10名が在籍しており、もう少し子どもの募集を頑張らなければならないという。学費は年間30,000USドル余であり、日本の感覚からすると非常に高額な学費に感じるが、そこまで高く設定しているわけではないという。また専任教員数は3名のみであり、そのほかにボランティアなどで関わるメンバーがいる。

この学校の特徴は、IQ120以上の子どもを受け入れ、特にディスレクシアやADHDなど発達障害をあわせもつ、2Eの子どもたちを積極的に受け入れていることにある。多くの子どもたちは公立学校等でなかなか適応できずに困難を抱えて、この学校にやってくるという。



図1 学校の内装

（2）学校の取り組み

学校では、ギフテッドの子どものためのヴァンガードモデル教育（The Vanguard Model of Education for Gifted Children）が確立されており、主に朝から午前中（9時から11時半）は基礎的な学習（読みや算数）、昼頃（11時半から12時半）から協働学習が行われ、午後（12時半から15時）はプロジェクトベースト（通称：S. T. R. E. A. M、SはScience、TはTechnology、RはResearch、EはEngineering、AはArt、MはMath）の学習となる。またこの学習の中ではアウトプットも兼ねて、書字の練習もされている（表1）。

表1 時間割モデル

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
8:00-9:00	Enrichment	Enrichment	Enrichment	Enrichment	Enrichment
9:00-9:10	Morning Meeting	Morning Meeting	Morning Meeting	Morning Meeting	Morning Meeting
9:10-10:15	B2 Reading Groups (Jully)	B2 Reading Groups (Jully)	B2 Reading Groups (Jully)	B2 Reading Groups (Jully)	B2 Reading Groups (Jully)
10:15-10:45	IXL Math (Kate)	IXL Math (Kate)	IXL Math (Kate)	IXL Math (Kate)	IXL Math (Kate)
10:45-11:30	Snack	Snack	Snack	Snack	Snack
11:30-12:00	B2 Robots (Kate) / B2 Spanish (Jully)	B2 Robots (Kate) / B2 Spanish (Jully)	B1 Robots (Kate) / B2 Spanish (Jully)	B2 Robots (Kate) / B2 Spanish (Jully)	Team Robots (Kate) / B1 Spanish (Jully)
12:00-12:30	CT (Teamwork)	CT (Game)	CT (Fitness)	CT (Code)	CT (Fitness)
12:30-14:00	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch	Lunch
14:00-14:30	Writing, word work (Jully)	Writing, word work (Jully)	Writing, word work (Jully)	Writing, word work (Jully)	Writing, word work (Jully)
14:30-15:00	STEAM (Kate Science & Jully)	STEAM (Kate Science & Jully)	STEAM (Kate Science & Jully)	STEAM (Kate Science & Jully)	STEAM (Kate Science & Jully)
	DEAR / writers applications	DEAR / writers applications	DEAR / writers applications	DEAR / writers applications	Friday Cleanup
	WIN TIME	WIN TIME	WIN TIME	WIN TIME	WIN TIME

印象の域を出ないが、この学校では積極的に2Eを受け入れているということを明示していることもあり、校長の発達障害に関する理解や知識も非常に豊富であると感じた。また、すべての子どもに対して、個別の支援

2. Midwest Academy for Gifted Education

(1) 学校の概要

Midwest Academy for Gifted Education（通称、MAGE）は、シカゴ中心部から車で約10分程度のところに位置している。ビルの中にあり、外見ではあまり学校らしさを感じられないところにある。IQ130以上の幼児（4才）から、後期中等教育段階の子どもたちを受け入れ、生徒数は約100名である。また教員は幼稚園から小学校段階ではおよそ1:8程度であり、中学校段階以上は1:1で授業が展開されている。インターネットでChicago and Gifted Educationで検索すると常に上位でヒットすることもあるが、学生募集には困っておらず、特に広告等を打たなくとも、ホームページからの問い合わせで十分に児童生徒を確保できているという。学費は年間約32,000USドルであるが、一部の子どもには奨学金が用意されている。

また2Eの子どもたちについては、どれだけ支援を要するかによって入学可否の判断が異なっている。基本的に生活年齢相応の社会的スキルを要求しているといい、それに達していない場合は入学できないと明示されている。加えて、個別的な治療が必要な場合は、家族自身で病院等に通ってもらうことになるという。



図4 STEAM 学習用教材

(2) 学校の取り組み

この学校の特徴は大学等の高等教育機関と連携し、積極的に才能を伸ばす取り組みを進めていることにある。また自己のメンタルとの向き合い方なども重視しているほか、視機能訓練や姿勢保持など医療的な支援も積極的に受け入れている。また算数や科学のコンペティションに出場する機会なども提供されており、中には非常に高い成績を得る子どももいる。非常に多くの外部リソースを有効に活用しながら、子どもたちへの教育を提供している印象を受けた。

多くの教室がビルの中にあり、体育館、美術室、ボードゲームや知恵の輪に取り組める部屋、算数教室、ロボット教室などが分かれて用意されている（図5～7）。各教室に多くの教材が用意されており、子どもたちはその中から自分に適したものを選び取ることができるようになっている。また授業の中で重視することに「創意工夫」（Ingenuity）と「創造性」（Creativity）を挙げており、その力を養うために子どもたち同士による協働学習にも力を入れているという。これらの力に重きを置く理由に、近年の生成AIの存在があるという。日本においても、AIに多くの仕事が取って代わられると言われているが、同様の課題を同校でも認識しているという。そのためにAIにできないことやそもそもAIに読み込ませる情報を作れる人材を育てていこうとしている。

他方で算数・数学をはじめ学習内容は各自の習熟度に応じて、完全に個別化されている。実際に複数名の子どもの算数教材を見ることができたが、生活年齢に関係なく学習が行われており、学年による区切りも一切なされていなかった。



図5 芸術活動の部屋

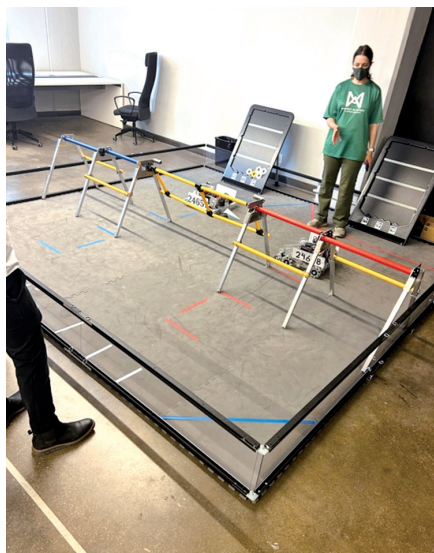


図6 ロボットを活用した学習



図7 LEGO 財団による教材



図8 感情等へのアプローチ教材

上でも述べた通り、この学校では年齢相応の社会的スキルなどを必要としており、入学後もそれを育むための授業が設定されている。ギフテッドの子どもたちは知能と社会的スキルが同じように発達しない「非同期発達」の特性をもつ子どもも多くおり、感情への気づきやそのコントロールを意識したアプローチ（図8）も行われていた。またいわゆる芸術等で高い才能をもつ子ども（タレンティッド）たちにとっても、自身の作品を説明するためなどに社会的スキルを重視して教えているという。

最後に子どもたちは大学との連携により、大学の授業を受けることもでき、それが単位としても認証される。そのため学士号をとるのに通常であれば4年かかるところ、この学校で一定の単位をとっているために2年半で修了するようなケースもある。

（3）学校の抱えている課題

学校独自の課題というものではないが、あまりギフテッドという言葉を表に出さないようにしているという。というのもイリノイ州においては、才能や英才教育という言葉がタブーとなっているという。そのため、学校名も略称のMAGEと呼ぶことがほとんどであるという。

3. Avery Coonley School

（1）学校の概要

Avery Coonley Schoolは、シカゴ中央部から電車で約1時間の閑静な住宅街に位置している。今回調査に訪れた学校の中で最も規模の大きい学校である。20世紀初頭、自身の子どものためにとある両親が設立した歴史の長い私立学校である。対象となる子どもは就学前から中学生までであるが、学費は年間約30,000USドル。なお、就学前の子どもの半日コースについては約10,000USドルである。

この学校についても、2Eの子どもをもつ保護者からの入学問い合わせが多くあるというが、リソースの問題などから基本的に受け入れていないという。また、規模も大きい学校であるため、入学者確保のために積極的に情報発信をしたり、学校見学を受け入れていたりする。筆者らの訪問にあたっては、保護者向けに提供される資料をいただいたが、非常に多くの情報が含まれていた。

（2）学校の取り組み

Avery Coonley Schoolは、豊かな自然に囲まれており、その立地条件をふんだんに活かし、情操教育にも力を入れている。自然の中にはアスレチックが用意されている（図9）ほか、子どもたちが昼食を取れるベンチなども用意されている。また学校内に入ると、中庭が校舎に囲まれる形で存在しており、そちらでも子どもたちは遊んだり、休んだりして過ごすことができるという。



図9 学校の校庭



図10 中庭の様子

こうした情操教育で子どもたちの社会的スキルの向上を図りつつ、学業にも大きな力を入れている。基本的にホームルーム用の教室に加え、教科によっては特別教室が用意されている。ホームルーム用の教室は比較的担任教師の裁量によって雰囲気を変えることができ、それぞれに特徴がみられた。しかし、どの教室でも多くの本が置かれていたり、学習教材が設置されたりしており、子どもたちの知的好奇心を満たす環境を作ろうとしている様子が窺えた。また、集中力を高めるために、誰でも使用できる多くのイヤマフやパーテーションが準備されていた（図11）。



図11 ある学級の様子

また、学校全体として高い学業達成は重点課題であり、そのために数学を習熟度別クラスで実施していたり、様々なコンペティションへの参加が推奨されたりしている。学校の壁一面には、トロフィーや賞状が張り出されており、そこに名前を連ねることが子どもと保護者の目標にもなっている。また数学のほかにも、プログラミング学習に関連したレゴの大会やロボット大会への参加も可能になっているほか、子どもたちがさまざまに作りたいものを作れるように3Dプリンターや工具なども多く取り揃えられている。そのほかにも音楽の教室には数多くのバイオリンが用意されていたり、教室によっては大学のアクティブラーニング室のような環境が用意されたりしているところもあった。

児童生徒数がある程度いることもあり、エスニックマイノリティの子どもたちも一定在籍している。そのため集団生活の中では文化の違いによるトラブルも発生することがあるということで、この学校では人権担当の

教員も配置している。カウンセラーを兼ねたような役割を担っており、子どもたち同士の関係性を修復するほか、自身のアイデンティティについて相談に乗ることもあるという。



図 12 トロフィー



図 13 イヤーマフとパーティション



図 14 3D プリンター

(3) 学校の抱えている課題

先述の児童生徒間のトラブルのほか、保護者関係において、特に自身の子どもであればよりハイレベルなクラスに入れるはずであると訴えてくる保護者もいるという。その際にはテストの結果をもとに、理解を求めることもある。

IV. まとめ

さて、ここまで3校での訪問調査について、それぞれの学校の取り組みを紹介してきた。いずれの学校も私立学校ということもあり、日本と比較しても高い学費を必要とするが、それぞれのターゲットにあった教育が提供されていた。またそのターゲットも、各校によって設定が微妙に異なっており、特に2Eの子どもたち向けの支援プログラムと、才能を伸ばすプログラムの両立は非常に難しいという話がどの学校でも聞かれ、2Eの子どもたちを受け入れるか否かという点では対応が大きく異なっていたことは示唆に富んでいる。

本稿冒頭で述べたように、日本においては特定分野に特異な才能を有する子どもたちへの教育は、どちらかというと支援、すなわち子どもたちの困難に寄り添う方向性で議論が進んでいる。もちろん、「まずは困難に寄り添う」ことが優先されているのであり、才能を伸ばすこと自体を否定している動きではないが、もしこの両立を図ろうとすると、少なくとも各学校で両方に対応することは困難であることは想像に難くない。この点において、日本においてはまず困難に寄り添うと決めたのであれば、まずはその方向での支援体制を強固に構築していくことが先決であるといえよう。

他方で、子どもたちのもつ才能に寄り添い、かれらの知的好奇心を伸ばそうと提供される学校の環境は正直なところ羨ましく思ってしまうほど充実している面もある。実際のところ、筆者が見ている子どもたちについても、こうした環境がもし学校にあれば、もう少し楽しく学校に通えていたのではないかと思ってしまうこともあった。イリノイ州で求められている学業達成のスタンダードについて言及していたのは3校のうち1校だけであったが、その1校においてもすぐにそのスタンダードをクリアすることで、より高次の学習に取り組めるようにしているという、いわば早修を行っていた。なお、日本においても、「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）」において、既存の学習指導要領の定める範囲を修了していれば、学年や学校段階を超えての学習も認められているが、多様な子どもたち30人を1人の教員が対応しなければならないという学習形態、さらにそもそも学習指導要領で求められる内容が過剰になっている「カリキュラム・オーバーロード」の問題に直面していることを考えれば、その対応は困難であるというほかない。

今回の視察は、それぞれの学校がオリジナリティを発揮することで、ギフテッドの子どもたちへの対応がこれほどまで可能であるという学校教育の可能性を感じさせるものであった。もちろん、このイリノイ州の取り組みをそのまま輸入すべきかという議論には慎重になるべきであろうが、しかしどのようにすれば可能になるのか、そうしたエッセンスを知ることは日本の学校教育の包摂性を拡張することにもつながると考えられる。今後もこれらの学校への継続的な訪問を通して、特に子どもの学習や発達、保護者の反応など、学校を取り巻く様々なアクターの視点に立って、日本におけるギフテッド教育の充実に向けた示唆を得ていきたい。

参考文献

- 松村暢隆（2003）アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援．東信堂，東京。
- 関内偉一郎（2020）アメリカ合衆国における才能教育の現代的変容—ギフテッドをめぐるパラダイムシフトの行方—．三恵社，愛知県。
- 山内乾史・原 清治（2018）第1章 才能教育について（概説）—日本における状況．山内乾史（編），才能教

育の国際比較．東信堂，3-30.

付記

本稿は運営費交付金教育組織改革分（組織整備）『学びサポート室』を中核とした縦断的・横断的・持続的な発達障害等の支援体制の構築，文部科学省委託事業「特異な才能のある児童生徒の指導・支援を行う教職員・保護者を対象とする相談支援に関する実証研究」（受託団体：NPO 法人 ROJE，研究代表者：伊藤駿）および科研費（24K21449）の成果の一部である。